

カナダと日本

今年の日加国交50周年を迎え、両国関係の一層の飛躍が期待されている。そこで、昨秋カナダを訪問した朝日新聞論説委員の松山幸雄氏とランキン大使に、国際的な視野から見た日本とカナダについて対談していただいた。両国の対外政策や対米政策の違い、女性の地位、カナダにおける労働問題や連邦と州の関係など、話題は広範囲にわたっている。



駐日カナダ大使
ブルース・ランキン氏



対談

朝日新聞論説委員
松山幸雄氏

大使 カナダの旅はいかがでしたか。
松山 バンクーバー、エドモントン、トロント、モントリオール、オタワの各地を訪問したわけですが、その間いろいろと親切にしてください、たいへん感謝しております。あと二週間早ければ、きれいに紅葉したカエデが見られたということですが、結構カナダの秋を満喫しました。

ただ、毎日ステーキを食べ、しかも日本語を話す機会がほとんどありませんでしたので、だいぶホームシックにかかりました。何しろ、朝から晩までカナダの知識人とカナダの政治や外交を論じる、という毎日でしたから。

トロントのマッセイ・ホールで、トロント交響楽団の演奏による「モーツァルトの鎮魂曲」を聴いたのは、たいへん忘れがたい思い出になりました。その演奏、とくに絃と合唱には非常に感銘を受けました。カナダ滞在中に息ぬきをしたのは、そのときだけです。中年男としては、他に例のないほどまじめ一本の旅行でした。大使 それはごくろうさまでした。

両国の違いと類似点

松山 ただ、ストの多いのだけはイヤでした。出発前は航空ストの心配があった。大使館ではスケジュール作りに苦労されたようですし、カナダ滞在中は郵便ストが起っていました。娘たちにカナダから絵ハガキを送る約束をしていましたが、それも果たせませんでした。各地で病院や教師のストも見ました。カナダ滞在中、ストに関する新聞記事を読まな

い日はなかったと言っても、言い過ぎではないでしょう。

私は資本家でも労働運動家でもありませんが、スト問題を解決できなければ先進諸国における民主主義の統治能力は大きな危険にさらされる、と強く感じております。それは明らかに、民主主義の進歩や安定を阻害します。この点、日本は終身雇用制度や企業単位の組合制度のおかげで、カナダや米国、ヨーロッパなどよりはるかに救われていると思います。

大使 カナダにおける労使関係と最近の事態については、どうか改善できないものか、私もいろいろと考えてきました。日本から学ぶべきことも多いでしょう。もちろん、労働者が組織し、団体交渉権をもつことの重要性は認めます。かつては、労働者の正当な権利や要求も、じゅうぶん認められていませんでした。ただ、最近では、それ（スト）が心配の種になっているのです。

特に松山さんがカナダにおられたときは、ストが集中的に起っていました。そのうち、郵便ストについて、少しその背景を説明しましょう。

郵便従業員など、公務員が団体交渉権を獲得したのは、およそ十年前のことです。当時の郵便従業員は、結婚して子供のある人で、年間約四二〇〇ドルの給与をもらっていました。モントリオールでも、地方の小さな町でも同じです。その頃の政府が定めた平均世帯（夫婦と子供二人）当り最低生活必要額は年間四千九百ドルか五千ドルですから、それより七八百ドルも少なかったわけです。労働者側は経営者側と話し合いをもと一生涯